

紀の川水系史

晴佐久 浩司

【古来からの課題】

紀の川・吉野川は和歌山県と奈良県を流れる全長 136km の大河ですが、奈良県の山々を水源とし、吉野川の方が 70km と長い距離を流れています。しかし、この河川がもたらす恩恵と厄災は奈良県に広がる大和平野には無縁であり、近世までほとんど和歌山県の紀伊平野に限定されていました。この河川を流れる水を巡っては、江戸時代初めから昭和に至る 300 年に渡り、受益者間で議論が繰り返されたものの両者の主張は折り合わず、戦後「十津川・紀の川総合開発計画」により吉野川分水が完成するまで、紀伊平野と大和平野の利水及び治水の諸問題が解決することはありませんでした。

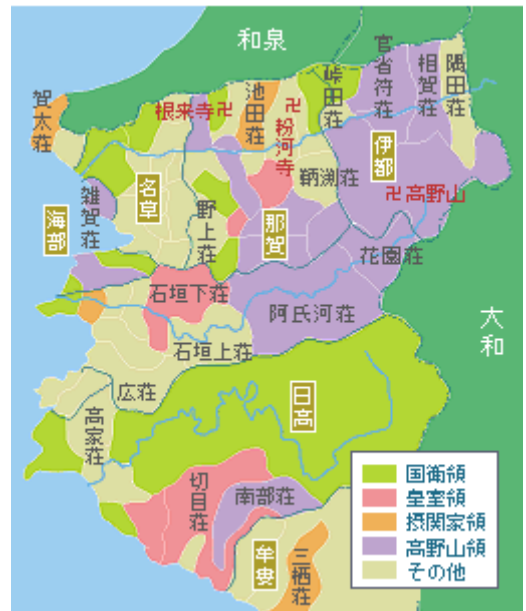


この紀伊平野と大和平野における農業がどのように発展して現在に至ったのか、それぞれの地域における歴史を紐解いてみたいと思います。

【紀伊平野における農業開発】

紀伊平野の多くは紀の川沿いに河岸段丘として形成されており、ここに広がる農地は河川より高い位置にあるため古来より水の確保に苦労してきました。中世になると、高野山を代表とする寺社による荘園開発が盛んに行われるようになりますが、多くは周囲の山から流れる小川を利用した小規模な水田開発に留まり、境界や水を巡って絶え間なく争いが行われていました。このため、紀伊平野では奈良時代から蚕糸が盛んとなり、不安定な稲作農業を補っていました。

江戸時代になり、徳川御三家の紀州藩が支配するようになると、本格的な水田開発が始まりました。全国の治水利水対策のモデルとなった大畑才蔵の「紀州流」と呼ばれる土木工法により長大な水路と河川堤防が築造され、河岸段丘と河川氾濫原の水田の生産の安定化を実現しました。この際に築造された「小田井」「藤崎井」などの水路は、現在でも現役として活用されています。





おおはた さいぞう
コラム① 【 大畑 才蔵 】

大畑才蔵は、55歳のときに紀州藩の下級役人として採用され、藩内の米の増産を命じられました。紀の川沿いの後背湿地に着目し、川の蛇行を直線に修正し両岸に連続した堤防を築き洪水を防ぎ、未利用地を新田として開発する構想（紀州流）を立てました。そして実施に当たっては、「水盛台」と呼ばれる測量器具を開発し、掘削や盛土する土量を正確に測定することで工事の緻密な実施計画を作成しました。その結果工事の無駄をなくし、複数の場所で同時に着工することで工期を短縮し経費を抑えるなど、革新的な土木工法を導入しています。また、才蔵は土木や農業の仕方について数多くの書物を書き残しており、その後の農村の発展に多大な影響も与えています。

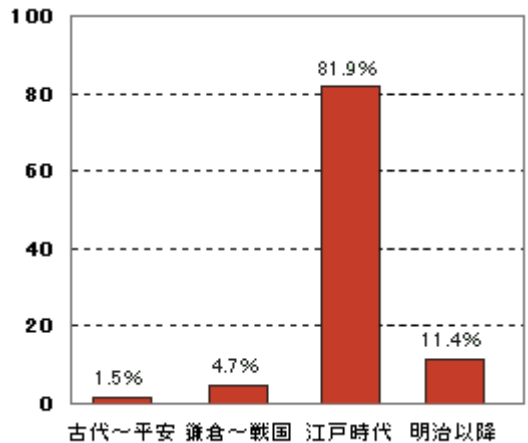
『大畑才蔵翁彰功之碑』パンフレット表紙（画像提供：水土里ネット紀の川連合）

【大和平野における農業開発】

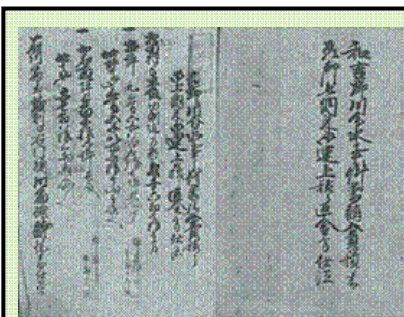
大和平野には周囲の山々から流れ出る小川が数多くあり、自給自足による古代の稲作には適していたと考えられています。その証拠に、この地では弥生時代初期から奈良時代にかけての集落跡や遺物など数多く発見されています。大和平野では他の地域よりも稲作が進んで富が蓄積したことにより中央政権が成立し、大化の改新にて公地公民制を敷き支配体制を盤石のものとしていきます。

奈良時代後半になると中央政権の支配が緩み、墾田永年私財法の施行などを受けて、大和平野においても貴族や寺院による荘園化が進みました。このように形成された荘園は分散して規模も小さく、荘園毎に河川に堰を設け導水するなど非効率な水利用を行っていました。ところが、江戸時代になり大阪や京都を中心に商業が発展してくると、農民らは年貢や時給を目的としていた稲作農業だけではなく二毛作による商品作物の生産を進めていきました。このような農業形態の変化により水需要が急増し、新たな水源を確保する必要が生じました。そのため実施されたのが、ため池の築造です。大和平野に現存する1600箇所のため池の約8割が江戸時代に造られたものです。

大和平野におけるため池の築造年代
 （近畿農政局ホームページより転載）



しかし、ため池だけでは、大和平野の慢性的な水不足に対応することはできませんでした。このため、この平野では幾つかの水田に米を作らない犠牲田を設け、2～3年の周期で稲作と畑作を交互に行う田畑輪換農法が行われていました。記録によれば、この地域の水田の約3分の1が輪換畑で占められていたとも言われています。輪換作物の主流は綿であり、明治の開国で綿の需要が低下するまで田畑輪換農法が続けられています。



たかはし さすけ
コラム② 【 高橋 佐助 】

高橋佐助は、現在の御所市長柄村の庄屋であり、江戸初期に吉野川の水を奈良盆地へ引き入れるよう嘆願しています。度重なる水争いを解消するため、「重坂を越せば、吉野川に豊かな水がある。あの水を奈良盆地に引けたら、水不足に悩まず米作りができる。」と考え、吉野川の分水を重坂に引水する計画を考えています。

『吉野川分水普請入費積り書』（農林水産省ホームページより転載）

【近代の新たな課題】

明治の開国により海外から安い綿花が大量に輸入されると、裏作として綿栽培をしていた大和平野の農業は転換を強いられました。綿の畑作が衰退し水田に戻されるようになると、大和平野では再び深刻な水不足に陥りました。明治以降、大和平野では10年に一度の割合で大干ばつに見舞われました。その中でも、大正13年の未曾有の大干ばつによる被害は甚大であり、これを契機として、これまで平地に築かれてきた小規模な皿池ではなく山間部で川を堰き止める大規模な谷池が造られました。代表的なため池として、白川ため池（昭和8年）、斑鳩ため池（昭和22年）、倉橋ため池（昭和32年）などが戦前・戦後に造られました。



『倉橋ため池』

（近畿農政局ホームページより転載）

一方、紀伊平野では、明治以降、和歌山県では伝統工芸品の生糸を殖産興業政策と位置づけ、明治19年に県による蚕糸工場の設置を契機として次々と民間の工場も設立され、生糸の一大産地へと成長していきます。大正時代には日本の製糸は世界市場を席卷しますが、世界恐慌で大打撃を被り、さらに開戦によって食糧作物への転換を余儀なくされました。こうして紀伊においても米の増産が求められるようになり、水需要が増大していきます。

こうした背景の下、冒頭に記述したとおり吉野川分水による大和平野の水供給対策が、奈良県より和歌山県に対し繰り返し要望されることとなります。大正時代から3度にわたり交渉が実施されましたが、いずれにおいても和歌山県の理解は得られず、計画は頓挫しています。この間、大和平野では上記のとおり大規模ため池の築造により急場を凌ぐこととなります。しかし、根本的な水不足の解消には至らず、大和では昭和19年と22年と立て続けに大規模な干害に見舞われています。

同じ時期、国の「復興国土計画事項」で紀の川水系は総合開発計画として選ばれ、国主導により関係者の討議や調査が実施されました。そして、ついに昭和24年、京都のプルニエ会館にて、「十津川・紀の川総合開発計画」として両県の合意が成立しました。この計画では、吉野川分水により大和平野に上水・農業用水を供給するとともに、紀伊平野の治水・利水問題を解決し、さらに水力発電により電気も供給するという事業で、その後の日本における水資源開発の手本ともなる歴史的大事業でした。



昭和4年4月18日付大阪毎日新聞

ここに、江戸時代の高橋佐助が提案してから300年来の悲願が成就されました。そして現在、大和平野は京阪神へ新鮮な農産物を供給する一大生産地となっています。